

スタディー・ツアーを通しての異文化学習

—平成15年度国際理解教育コース「異文化体験実習Ⅱ」—

小粥 良

Learning Another Culture through a Study Tour
—“Crosscultural Experience Ⅱ” 2003—

KOGAI Ryo
(Received July 30, 2004)

キーワード：異文化理解、国際理解、海外研修旅行、ウクライナ

国際理解教育コースではコース指定科目「異文化体験実習Ⅱ」（1単位、選択必修）として、隔年で2年生と3年生を対象とした海外研修旅行を実施してきている。従来は東南アジア方面を研修先とし、マレーシア、シンガポールへの第1回海外研修旅行（平成10年3月4日—27日）以来、第2回（マレーシア、シンガポール、平成11年7月11日—8月1日）、第3回（タイ、マレーシア、シンガポール、平成13年8月28日—9月20日）と、身近なアジアでの異文化体験を重視してきた。特にマレーシアは、マレー系、中国系、インド系からなる多民族・多文化の共生という観点から研修の中心に位置付けられ、カンポンと呼ばれる農村でのホームステイ体験は、英語も通じない状況下で数日を村人たちと共に過ごし、マレー文化の深部に触れる稀有な経験を得る機会として、研修の目玉とも言うべきプログラムとなっていた。平成15年度の海外研修旅行も、当初はやはりマレーシアを中心とする東南アジアを目的地として実施する予定であったが、中国南部に端を発したSARSが台湾、シンガポール、ヴェトナムでも猛威を振るうという事態に遭遇し、やむなく夏休み中実施という当初の予定を春休みに延期し、目的地そのものの変更も検討せざるを得なくなった。

【なぜウクライナなのか】

マレーシアと同程度の費用で、同程度に有意義な研修を実施でき、しかも安全面での心配が無く、SARSの懸念も存在しない国はどこかということで、教室としてはあれこれ可能性を話し合ってみたが、結論が出ないまま夏休みとなった。そのような折、9月に筆者が友人を訪ねてウクライナ西部に旅行した。

平成11年度にサバティカルでオーストリアのウィーンに滞在していたときに知り合ったウクライナの友人たちは、当時、環境学、森林学、医学など理系の博士課程の学生たちであったが、現在は助手や助教授として大学に勤務していた。ウィーンで知り合ったときに既に歴史学の助教授であった人もいる。これらの友人たちは、みなウクライナ西部の中心的な都市、リヴィウに住んでいる。この友人たちの協力が得られれば、ウクライナ西部を中心

に据えた研修プログラムが十分に組めるのではないかという考えが浮かんだ。安全面でも、経済的にどん底を抜け成長期に入ったウクライナは一時のような危険な話は聞かれなくなったし、筆者が旅した上での実感からも、現地の人が行く団体旅行であれば、むしろ西ヨーロッパの国を旅行するよりも安全なぐらいに思われた。¹⁾

ウクライナには外務省の渡航に関する注意・警告等も何も出ていない。見るべきものとしては、キエフにもリヴィウにもユネスコの世界遺産に指定された歴史的建築群があり、各地に中世の城なども存在する。また、友人の一人はカルパチア山脈の農村出身で、ウクライナの典型的な農村、つまり電気は供給されているが水道もガスも無いような田舎でのホームステイが実現可能である。しかも、彼の父親は3年前まで村の学校（小中を兼ねる）の校長を務めていたので、ホームステイのアレンジを協力してもらうのに都合が良い。考え始めれば、次々に好都合な要因が浮かんでくる。しかも、9月の筆者の旅行は私的なものではあったが、既に下見旅行をしたも同然ではないか。

更に、ウクライナに到る経路を考えると、ロンドン経由、パリ経由、ウィーン経由、モスクワ経由などが考えられるが、航空運賃、安全性、西部ウクライナとの歴史的繋がりなどの点から、ウィーンを経由することが望ましいと思われた。ウクライナ一国だけで研修を行うのではなく、西欧の端に位置し、東欧と関係の深いオーストリアのウィーンを訪れ、国連施設などを見学することも有意義に違いない。1772年に西部ウクライナをオーストリアの版図に編入したハプスブルク家の宮殿などを見学することも、東西冷戦後にわかに復活してきた「中欧」概念の歴史的背景を知るのに役立つであろう。また、ウィーンであれば筆者はよく知っているので、容易に引率できる。

帰国後、文献やインターネットを調べ、ウィーンまたウクライナでどのような研修が可能かを調査し、ファイルを作成していった。ファイルはどんどん膨らんで、3冊にもなった。意義ある研修旅行が十分に可能という確信を得た後、教室に提案を行った。教室の承認を得た後、学部長に相談し、学務厚生委員会に案を提出するという手順を踏んで、実施に向けての手続きを経ていった。その際、ウクライナそしてウィーンを目的地とする理由を明確にして提案文書に盛り込むために、私の頭の中でさまざまに浮かんでいたアイデアを整理してまとめたものが以下の箇条書きである。²⁾

何故、ウィーン、そしてウクライナなのか？

理由：

- 1) 日本ではまだあまり馴染みのない国ウクライナであるが、キエフ公国にさかのぼる長い歴史と豊かな文化をもつ国であり、私達がロシア料理として知っているものの多くは実はウクライナ料理であったり、ロシア人と思いついでいるコサックもその発祥はウクライナであったりするなど、近世になって大国ロシアに支配された歴史のために、日本人にとって見えにくい存在となっている。9世紀にキエフ公国を建てたルーシと呼ばれた民族はその後の歴史の中で、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの3つの民族に分かれていった。ウクライナの近代史は複雑で、ロシアに支配された東部地域とオーストリア・ハンガリー帝国の領土であった西ウクライナ地方では、言語的にも宗教的にも相違がある。また、入り交じって住む様々な少数民族集団を抱えている点で東欧地域の他の国々の事情と共通しているが、大国の狭間で翻弄されてきた東欧の

歴史に触れ、民族という問題を考えるにはまたと無い機会となるだろう。言語的・文化的にロシアと非常に近い関係にありながら、自分達はウクライナ人であるということ強く意識させているものは何なのか考えることは、民族と文化の関係についての理解を深めるであろう。

- 2) ウィーンという西欧を代表する都市の一つを訪れ、様々に見聞した後でウクライナを訪れることにより、まずロシアの影響の強いキエフが西欧的な都市とは非常に異なった雰囲気を持った都市であることに気づくであろう。次に西ウクライナ地方を訪れることで、西ウクライナとオーストリアとの文化的繋がりも体感されるであろう。ヨーロッパの文化と言っても、実はそのように一言で括ることのできない多様性および多層性が存在することを理解することができるだろう。
- 3) ウィーンという都市は、かつて東欧地域に広い領土をもっていたハプスブルク帝国の帝都であったという歴史的事情から、小さな共和国になった後も政治的に重要な位地を占めている。冷戦時代には東側ブロックとの接点として、外交上重要な役割を果たす位地にあった。それはチェコ、ポーランド、バルカン諸国との地理的近さに加え、歴史的なつながりが深いことにもよっていた。国連機関のビルが立ち並ぶVICという地域が存在している。ウィーンで知り合った日本人の国連職員の方に連絡を取って、見学させていただこうと考えている。
- 4) またリヴィウという都市の文化が、東欧文化と西欧文化の接点を示していることは非常に興味深い。建物の様子ばかりではなく、精神性においてもそのような面があり、宗教は正教の習慣や儀礼を守りながらもカトリック教会に属するという所謂帰一教会(ユニエイト)＝ギリシャ・カトリックである。近年、ローマ法王がリヴィウを訪問したのも、そのような事情による。ソビエト時代には宗教は圧迫されていたが、人々の間に敬けんな宗教感情が生きており、教会の復興は目覚ましい。日曜日には教会の外にまで礼拝に集う信者が溢れだしている。ソビエト時代に反宗教博物館にされていた修道院が、現在、宗教博物館に生まれ変わり、博物館に付属した美しい礼拝堂は、現在礼拝の場として復活している。マレーシアやタイで生活に根差した宗教に触れるのと同じ程度の衝撃がここにはあるだろう。また、共産主義によっても抹殺し得なかった宗教とはそもそも何なのか、考える機会となるだろう。
- 5) ソビエト時代をくぐり抜けた国の様子を直接見聞きする機会となるだろう。ソ連時代から続くシステムの不便さは、いまなお色濃く名残をとどめる。ソビエト崩壊後の経済的困難は2000年頃には頂点に達していたが、現在では好況を呈するロシア経済に引っ張られるかたちで、経済は順調な回復を示している。将来的にはEUやNATOへの加盟も希望しているウクライナは、制度の民主化を目指して改革を進めて来たが、まだまだ課題が多く残っている。2004年5月にはポーランドやチェコ、バルト3国など10カ国がEUに加盟するが、ウクライナはまだ当分加盟を実現できそうにない。このような事柄が報道で大きく取り上げられていることの意味を、西欧と東欧の両方を訪れることにより、実感できるだろう。要するに、現代史や現在の世界情勢についての視野を広げることができる。更に、ウクライナ人の人間的な温かみや優しさに触れて、冷戦時代にマスコミを通じて形成された負のイメージを払拭することができるだろう。ソ連人はアメリカ映画では常に冷血漢として描かれ、まるでロボットのように無表情な人々であるかのように喧伝されてきたが、ウクライナ人は非常に人間的で、

豊かな感情や細やかな思いやりをもった人々である。

- 6) ウクライナは、東欧地域の中では日本語を学ぶ学生の数が多い。それだけ、日本に対する関心も高いようであるが、残念ながら、まだ文化交流はわずかである。人々の日本に対する理解も、まずは日本製品（車など）のイメージにとどまっている。しかし、昨年から今年にかけて、キエフやリヴィウでは日本文化を紹介する催しがいくつも行われたし、またこれから行われようとしている。リヴィウのオペラ座では日本から100名の市民合唱団が訪れ、第九の合唱を歌ったとのことである。ウクライナで日本語の学習者を支援し、日本文化を紹介する活動を続けている日本センター（在キエフ）を訪れ、お話をうかがう機会を設けたいと考えている。また、欧米から訪れる学生ツアーは増えているようだが、日本からというのはまだ珍しいことと思う。山口大学から行くことが、パイオニア的意味をもつだろう。リヴィウ大学の日本語学科の学生との交流の場も設けたい。リヴィウ大学の史学部の助教授が知己なので、仲介をお願いするつもりである。
- 7) キエフやリヴィウは、ユネスコの世界遺産にも指定されている歴史ある都市である。リヴィウ近郊には、非常に多くの古城も残っているが、残念ながらソ連時代に結核患者用のサナトリウムなどに使われ、文化財として維持するために補修を受けることはなく、荒れ放題に放置された。観光の目玉となりうるような素晴らしい建築の惨状、また独立以来10年を経ても資金不足のために修復作業が進んでいない現実を目撃することは、歴史認識をもつ上で有意義であろう。そのような城は決して悲惨な状態にあるばかりではなく、オリジナルな設計の美しさは感じられ、周囲の自然の美しさや地平線まで畑の広がる広大な風景を楽しむこともできる。またゾロチヴ城という城には、18世紀の貴族の東洋に対する憧れを示すティー・パレスという建物があり、小さな日本庭園に赤い鳥居が立っている。ここと山口の萩焼作家の方を繋げて、何か交流の端緒になるようなことはできないだろうか。その可能性を探ってみたい。³⁾ このような18世紀のティー・パレスという建物はヨーロッパでも3つの例しか無い珍しいものとのこと。
- 8) カルパチア山脈の小さな村でホームステイを行う。英語はまったく通じないと考えた方がよい。わずかなウクライナ語の単語は学習していくし、2泊3日の短い滞在ではあるが、言語以外にも身ぶり手ぶりなど使って、懸命にコミュニケーションを取らねばならないであろう。純朴な人々の住む本当に田舎の村である。電気は通じているが、ガスも水道も無く、水は電動ポンプでくみ出し、薪をくべたかまどで煮炊きをしている。かまどは冬には暖房にもなる大きなペチカ（タイル張りストーブ）とも繋がっている。ヨーロッパにもまだこれほどまでの田舎が残っているのかというような村。（ウクライナではごく当たり前の村だが。）農家なので、家の裏には当然家畜小屋もあり、トイレは汲み取り式で家の外につくられている。小粥助教授の友人の郷里だが、その友人の父親が村の小学校の前校長なので、ホームステイを組織してもらう予定である。（すでに大丈夫との返事あり。）小学校も見学させていただく。マレーシアのホームステイにも負けないような面白い経験となるはずだ。
- 9) リヴィウ大学の史学科の学生との交流も考えているが、特に英語の話せる学生に多少の謝礼をお払いして、付き添いとして遠足などに一緒に来てもらう。英語でコミュニケーションを図る機会となろう。村でのホームステイにもそのような学生に4人ほ

ど来てもらう計画である。

- 10) リヴィウの野外民俗博物館では地方色の強い文化的伝統にも触れることができる。(わらぶき屋根の家の土間で生活していた様子、古い木造の教会、100年程前の村の小学校の建物など。)
- 11) ウクライナは外務省の渡航に関する警告等も何も出ておらず、西ヨーロッパの国より特に危険ということはない。言葉が通じないことが一番の不安要因であると思われるが、団体で普通に行動している限り何の問題も無い。思慮深い行動が必要なのは、どこに行っても同じことである。(夜、危険な地域に行かないとかいったことは、アメリカでも西ヨーロッパでも当たり前のことである。) キエフは大都会なので、それなりに注意は必要であるが、郊外のホテルに滞在し、都心での自由時間は設けない。
- 12) リヴィウには素晴らしいオペラ劇場があるので、是非オペラ鑑賞の予定を組みたい。ウィーンの国立歌劇場はもちろん世界3大歌劇場の一つであるが、リヴィウの歌劇場の方がずっと割安で見られるということと、19世紀の歌劇場の面影がよく残っているので、こちらで見ることにしたい。日本では新国立劇場という立派な歌劇場ができたとはいえ、大変モダンな建築であり、伝統的な歌劇場で観劇するという機会は皆無である。ヨーロッパのオペラ劇場を訪れることは、これも一つの異文化体験といえる。

【日程を組む】

以上のように目的地としてウィーン、キエフ、リヴィウを中心とする西部ウクライナを選定することは決定したが、この提案をもとに実際の日程を組んでいくために、コーディネーターをお願いした友人と密に連絡を取り、訪問予定の諸機関とも交渉していく必要があった。航空券とウィーンでの宿泊先については日本の旅行社に手配をお願いできたが、ウクライナ国内に関する部分、すなわち、宿泊、食事、団体バス、現地付き添い、ホームステイ、西部ウクライナでの教育機関訪問、入場チケットや鉄道乗車券の購入等は現地コーディネーターのミコーラ・フスティ氏(リヴィウ情報インフラストラクチャー研究所助手)に頼らざるをえない。フスティ氏とは一学期間ほぼ毎日、メールのやり取りがあった。同時に、キエフやウィーンでの訪問先との交渉は別途、私が行わなければならない。

さまざまなやり取りのうちに、当初に組んだ予定を途中で変更せざるをえないケースも出てくる。例えば、キエフの日本センターというものが、インターネットで調べたときに出てきたものに2種類存在していたのだが、そのことに気づくのに少し時間がかかった。一方に日本大使館が関係する日本語教育支援のための日本センターがあり、これとは別途、日本のNGOが現地のチェルノブイリ被災者救援団体を援助して設立した日本センターが存在していたのだ。それでは両方訪問しようかということでも話を進めていくと、大使館関係の日本センターの方は現在移行期で活動があまりなされていないということが判明し、結局、大使館員とのメールのやり取りで、日本センターの代わりにキエフ外国語大学の日本語コースを見学してはどうかということに落ち着いた。更に、東京杉並のNGO「チェルノブイリ子供基金」が支援するリハビリセンター見学は、そこに日本センターという名称の日本語学習室が設置されていたために偶然そのNGOと連絡を取ったことがきっかけではあったが、これもまた非常に有意義な見学と思われたので、やはり実施することとした。このように日程は、原案を何度も改定しつつ最終版に至った。ウィーンの国連機関見学も、知人の国連職員がタイに栄転となりウィーンにはいなくなってしまったので、予定

を変更して国連自体が提供している施設見学ツアーに参加を申し込むこととなった。

また、日程表に合わせて項目別に詳しい予算表を作成していったが、ウクライナ国内のコストについては、観光地でのガイド料金など正確な金額が現地に行ってもその場の交渉にならないと明らかにならないものもあり、予算内に収められるかどうか一抹の不安もあった。フスティ氏が大丈夫という言葉に信じるほかはなかったが、実際には思ったよりも低いコストに抑えることができ、充分予算内で実施することができたことは幸いであった。

【説明会】

仮日程が決まった段階で、平成15年10月22日（水）、教育学部内学生に向けての説明会を開催した。国際理解教育コース以外の学生も数名出席していた。（残念ながら旅行の申し込みには至らなかった。）ウクライナという国についての紹介、費用・日程・事前研修についての説明、レビューについての英語版観光案内ビデオの上映などを行った。

11月4日（火）の申込み締め切り後、12月5日（金）に小郡の旅行社CCIツアーズの宮原誠氏に来ていただき、旅行準備説明会として、パスポート取得、海外旅行傷害保険、トラヴェラーズ・チェック、その他こまごまとした海外旅行の注意点についてご説明いただいた。また、筆者からもヴィザ申請書の記入について説明した。

募集人数は20名程度であったが、実際に申し込んだ学生は16名であった。国際理解教育コースの2年生が10名、3年生が6名であった。引率を務める筆者を含め、17名の団体となった。3年生の参加者が少なめであったことの原因としては、カナダのリジャイナ大学に留学中の者が2名いたこと、すでにリジャイナ大に1年留学し異文化体験は充分にあるので「異文化体験実習Ⅱ」を取る必要がないと自分で判断した者が1名いたことなどがあげられる。（この授業は選択必修で、参加は自由である。）

【事前研修】

この研修旅行に参加すると「異文化体験実習Ⅱ」という国際理解教育コースのコース指定科目の単位が認定される。それゆえ、断じて単なる物見遊山に終わってしまってはならない。授業としての学習内容が伴っていないと行かない。異文化体験という捉えどころのない目標をどう設定し、どう評価するのか。なるほど、研修の日程はかなりハードにスケジュールが詰まっており、それをこなすだけでも大変である。17日間の研修を終えた者は、それだけでも当然何かを学び、日本とはかなり異なった環境への適応という一種のサバイバルを成し遂げたことになる。しかし、事前の準備次第で、研修本番でのその国の文化や諸事情に対する理解度は大きく異なってくるはずである。また、ウクライナでは買い物などの通常の場合でも英語はまず通じない。文字もキリル文字という英語のアルファベット（ラテン文字）とは非常に異なったものを使用している。たとえ僅かでもウクライナ語についての知識があれば、カルチャー・ショックが緩和され、現地の人々との交流にも役立つであろう。

以上のことを踏まえ、事前研修の内容を次のようなものとした。1) あいさつ程度の簡単なウクライナ語の知識、2) ウクライナ語についての解説を通してウクライナの歴史に触れる（キリル文字の成立、ウクライナ語とロシア語の関係、帝政ロシア時代からソ連時代を通じての東部ウクライナにおけるロシア化政策、国語運動がウクライナ独立に果たした役割）、3) ウクライナの諸事情（歴史、経済、宗教、食べ物）についてのグループで

の調査と発表、4) チェルノブイリ被災者を支援している宇部市のNGO「ドゥルージバ」事務局の方のレクチャー、5) 旅行全般についての注意事項。

事前研修は第1回平成16年1月9日(金)1・2時限、第2回1月16日(金)1・2時限、第3回2月16日(月)9:00-15:00の計3回実施した。

1)の「あいさつ程度の簡単なウクライナ語の知識」については、キリル文字を学習し、筆者が事前研修のために作成した単語・例文集に基づいたレッスンを行った。もとより、非常に限られた時間の中で「会話」といえるほどの内容を学習することは不可能である。現地での研修が始まってからの学生たちは、この単語・例文集を片手に積極的に単語レベル、あいさつ程度のウクライナ語を学習しようとしたのだが、現地に着く前の事前研修の段階でそのような積極性を引き出すことは期待すべくもなかった。到達目標は最低限度のことに絞られた。すなわち、キリル文字がラテン文字と同様にアルファベットであり、子音字と母音字の組み合わせによって音節を形成していること、アクセントのある音節は長めに読まれること、そして以上の規則を知っていて個々の文字の表す発音さえ覚えていれば、意味は理解できなくても音だけは読めるようになるという事実を把握することが第一の目標であった。ウクライナ語の読み方は英語やフランス語などとは違って非常に規則的で、書かれた文字をその通りに読んでいけば正しく読める。日本語のローマ字表記と同じくらい規則的である。第二の目標として、簡単なあいさつ(「おはよう」、「こんにちは」、「さようなら」、「ありがとう」など)を覚えることがあった。それだけである。ウクライナ語の文法を本格的に学ぼうとすれば、名詞の3つの性と7つの格、動詞の人称変化、前置詞の格支配、時制とアスペクト等のかかなり複雑な文法事項を理解しなければならないが、国際理解教育コースの学生たちは共通教育の初習外国語でドイツ語(同様の文法概念を多く有する)を修得した者がほとんどいないのであるから、そのような文法概念はまったく新しい事柄であり、まずそうした概念を理解させることに非常な時間を費やさなければならないことになる。事前研修の中で占めるウクライナ語レッスンの割合は、ほんの一部である。したがって、文法的なことはばっさり切り捨て、とにかく文字の学習に焦点を絞らざるをえなかった。キリル文字アルファベットの説明の後、自分の名前をキリル文字で書いてみるという練習を行わせたが、この程度のことでも、まったく新たに学習する文字の場合には当然のことながらひどく時間がかかる。

「ウクライナ語についての解説を通してウクライナの歴史に触れる」については、(ここでは詳しい説明は省略せざるをえないが)実はウクライナ語の歴史を理解することがウクライナという国の歴史を知ることと密接に繋がっている。したがって、1)の簡単なウクライナ語レッスンと連動してウクライナ語そのものの歴史の変遷についての解説を行うことが有益と思われた。それゆえそのような小講義を二度行った。

3)「ウクライナ事情についてのグループでの調査と発表」は、ただ受動的に講義を受けるのではなく、自ら積極的に調べ学習を行うことで、ウクライナについての知識がより身近になり、より強く印象付けられることを狙ったものである。

4)の「宇部市のNGO事務局の方のレクチャー」というのは、キエフで日本のNGOが支援するリハビリセンターを見学することに備え、宇部という身近な地域に同様のNGOが存在することを遅ればせに知った筆者が特にお願ひして、事務局の方に来ていただき、プロジェクターで現地映像を示しながらレクチャーをしていただいたというものである。

5)については、実際的な必要からであるが、研修旅行全般に関わる出発直前の諸注意

を与えることで事前研修の締めくくりとした。

【現地での実施】

日程は補遺1の通りであるが、ここでは紙数の都合上、気が付いた点を少し述べるに留めたい。

移動等は大きな問題も無くスムーズに進んだ。ウィーンでの最初の晩は、現地の付き添いをお願いしたオーストリア人の友人が案内してくれた伝統的なケラーで、ウィーン名物の子牛のカツレツWiener Schnitzelを食し、市電での移動の際も美しく照明された夜の市街の光景を堪能することができ、学生たちも長時間のフライトの後であったにもかかわらずリラックスして楽しんでいる様子であった。

しかし、翌日、キエフの空港に到着すると、学生たちは不安を感じ始めた。空港の中には警備の軍人たちが立ち、威嚇するように睨んでいる。旧ソ連の雰囲気である。記入方法のわかりづらい入国カードと税関の申告書に手間取り、なかなか先へ進めない。入国審査でも税関でも担当者は軍人のような強ばった表情で、学生たちはすっかり萎縮してしまった。「先生、ウクライナ人ってこわい」という学生の声に、これはいけないと筆者は慌てた。入国ゲートで待っていてくれた現地付き添いに無事に合流し、空港建物外に待機していたバスに乗り込むと、「皆さん、ウクライナ人がこわいのは、空港だけですから安心してください。街で出会う人たちはとても親切ですよ。」と大きな声でアナウンスした。

実際、その後、学生たちは現地の人々の優しさに触れ、次第にリラックスしていった。特に現地付き添いの方々のお蔭が大きい。リヴィウ大学、リヴィウ工科大学で交流した現地学生たち、またホームステイのホストファミリーの方々も皆大変親切で、空港を出てからのウクライナ体験は学生たちの期待をはるかに超えて喜ばしいものであった。

キエフの洞窟修道院、リヴィウの歴史地区など世界遺産に登録された名所の見学も楽しかったが、学生たちがそれ以上に生き生きと楽しんでいたのは、現地の人々と触れ合う場であった。後で実施したアンケートの結果を見ても、最も大変であるはずの農村ホームステイが、実は最も楽しく印象的であったことがわかる（次項参照）。

ウィーンに戻るころには、学生たちは「ずっとウクライナにいたいのに残念だなあ」とまで言うようになっていた。この出会いと触れ合い、そしてそれによる実感こそが、何物にも代えがたい現地研修の賜物である。文献を通じて、メディアのイメージを通じてウクライナについて知っているというだけでは得られないものだ。こうした心の交流の中には、それ「について」知るというよりも、直感的把握のうちにそのもの自体を知ることが含まれていると筆者は考える。自分とは関係のないよその国の人々とその暮らしが、突然自分と個人的なかわりをもった存在に変わる。これは実際にその国に行ってみなければ、なかなか生じえない事態である。

また、不便な外国での団体行動を通して、学生たちに精神的な成長が見られた。

ウクライナに入った当初は、国際電話がなかなか掛けられない状況があり、学生たちから不満が聞こえてきた。キエフのホテルの部屋から直通でダイアル通話できるはずであったが、不思議なことに、ほとんどの部屋からできなかったという。（筆者ともう一人の学生ができたのみであった。）そのような次第で、キエフ市内観光、リヴィウへの移動と忙しい日程が続く中、ほとんどの学生は、リヴィウのホテルに着くまで電話のチャンスが無かった。ところが今度は、リヴィウのホテルでは部屋からの国際電話が掛けられないと判

明した。1階フロント前のカード式公衆電話からはできるはずだが、あいにくフロントではテレフォン・カードを切らしていた。学生たちの絶望的な顔色を見て、たとえ予定をずらしても、電話局に行って電話の機会を作ってあげるべきだと判断した。電話局で家族に電話し、テレフォン・カードも購入できて大喜びの学生たちを見て安堵していると、現地コーディネーターのフスティ氏が「泣いている女の子がいる。何があったのか。」と尋ねるので、ふと見ると、目を真っ赤に泣きはらした女子学生が一名いた。慌てて飛んで行き、現金でも盗まれたのか尋ねると、「なんでもありません。ただ、家族の声を聞いたら涙が出てきて・・・」という答えが返ってきた。啞然としたが、このことをきっかけに、初めて海外に出た学生たちの心細さを思いやらなければならないと悟った。

当初はこのように幼さが感じられ、受動的で、(詳細は書かぬが)多少自己本位なところもあった学生たちだが、次第に団体行動における個人の責任に気づき、バスへの荷物の搬入の際も皆が率先して動くなど、チームワークができるようになってきた。言葉の通じない農村でのホームステイにおいても、2、3人ずつ別々の家に分けられ心細い状況にもかかわらず、積極的にボディー・ランゲージでホストファミリーとコミュニケーションを図るなど、大いに明るく肯定的な態度で臨むことができた。電動ポンプが無くて、使える水が井戸水だけの不便な家庭に割り当てられた学生たちも、不平を言わず、そうした事態を楽しんでいる様子であった。(さすがに、シャワーは隣の家で使わせてもらったが。)

ウクライナの公衆トイレ事情はまだ非常に悪く、便器に便座がついていないとか、紙が置いてある場合でも非常に硬く質の悪い紙であるとか、とにかく汚いとかいったことが、「この国で一番のカルチャーショック」であるという学生もいたが、しかし、同時に大抵のことは「慣れる」ものだし、なんとかなるということも学んだようである。

以上の観察は、筆者の主観的なものであるが、次項では、事前研修開始時と海外研修旅行最終日と二度にわたって実施したアンケートの結果を分析し、筆者の観察についての客観的な裏づけとしたい。なお、アンケート(2)の結果の詳細な紹介は、紙数の関係上、残念ながら本稿ではできない。数値で見やすい部分、アンケート(1)と比較しやすい部分に限って見ていくこととする。

【2度のアンケートに見る意識の変化】

<アンケート(1)>

補遺2は事前研修初日(1月9日)に実施したアンケートである。事情により欠席の者が5人いたので、回答したのは11名である。指摘しておかねばならないが、学生たちはウクライナ事情について既に多少の知識を持っていた。これは筆者がうっかりしていて、研修開始時にすぐ実施する予定であったものが第1回の最後にずれ込んでしまったためである。

「1. ウクライナの首都はどこですか。」という問いの正解率は、さすがに100%であった。「2. ウクライナでは何語が話されていますか。」は多少ひっかけのような問いで、答えは「ウクライナ語とロシア語」である。東部では帝政時代以来のロシア化政策の結果、ロシア語を日常語としている住民が多数を占めるが、西部ではウクライナ語を日常語とする者が大多数である。11名中5名が正解(45.5%)、残りの6名はウクライナ語のみを挙げていた。「3. ウクライナの宗教は何ですか。」の正解は「正教(ギリシャ正教、東方正教などとも呼ばれる)およびユニエイト(帰一教会、ギリシャ・カトリックとも呼ばれる)

が主要な宗教」ということになるが、学生の回答は「キリスト教」5名、「カトリック」3名、「ギリシャ正教」2名、「キリスト教、イスラム教、ユダヤ教」1名となっていた。(最後の回答はある意味では一番正確であるが、主要宗教として西部地域のユニエイトと東部地域の正教をまず挙げるのが期待されていた。「キリスト教」という回答は大雑把すぎる。またウクライナの正教は現在2つの派に分かれているが、そこまでは当然知らないことが予測された。)「あなたがウクライナという国に対して持っているイメージを、いくつかの単語を列挙して表してください。」という問いに対しては、「寒い／寒そう」という言葉が全員の回答に見られた。「旧ソ連／旧ソビエト連邦／旧ソビエト領」5、「チェルノブイリ／チェルノブイリ原発事故」3、「ボルシチ」2、「ロシアの近く／ロシア」2(筆者注：ウクライナはロシアではない)などの回答以外は、複数者が出した回答は無かったが、単独回答を紹介すると、「黒海」、「ルーマニアの近く」、「ドネツク炭田」、「ミラ＝ジョヴォヴィッチ」、「世界遺産がある」、「未発展」、「ウクライナ・エッグ(筆者注：ピサンキと呼ばれるイースター・エッグのことであろう)」、「ピロシキ」、「あまり知られていないところ」、「毛皮の帽子」と、一国の「イメージ」としては乏しく、断片的なものであった。

<アンケート(2)>

補遺3のアンケート(2)は、3月14日、海外研修旅行からの帰路に実施したものであり、参加者16名全員が(2年10名、3年6名)回答した。まず、問2. から問4. について回答数を項目別に示すと、以下の通りであった。

2. 「事前研修会は有意義だったと思いますか？」

1) 4 2) 4 3) 6 4) 2 5) 0 6) 0

3. 「事前研修会での簡単ウクライナ語会話学習は、役に立ちましたか？」

1) 0 2) 8 3) 7 4) 1 5) 0 6) 0

4. 「事前研修で自分たちが調べたことは充分であったと思いますか？」

1) 0 2) 3 3) 4 4) 9 5) 0 6) 0

事前研修全体に対する学生の評価は、「ややそう思う」から「強くそう思う」までが14名であった。「あまりそう思わない」が2名いるが、概ね良好な評価であった。ウクライナ語学習についても、「そう思う」8名、「ややそう思う」7名で、「あまりそう思わない」は1名だけであるから、まずまずの肯定的な評価と言える。問い4. は参加学生自身の取り組みに関するものであるが、「あまりそう思わない」が9名と多いことが目を引く。限られた時間内での事前研修なので仕方がないが、実際に現地に行ってみて、「もっと調べておけばよかった」という反省が出てきたものと思われる。しかし、現地に行く前にそれだけのモチベーションをもつことはなかなかあり得ない。筆者がこの問いを設定したのは、むしろ、事後的に出てきた反省の意識を見るためであった。今回の経験で事前に調べることの大切さを意識できたのであれば、それは今後の糧となるはずだ。

次に「6. 研修旅行の訪問先で最も意義深かったところはどこでしたか？」に対する回答としては農村でのホームステイを挙げたものが圧倒的に多かった(11名)。次いで、日本語学科の学生たちとの交流であった(3名)。その他は、「リヴィウと国連」、「どこは

限らず、日本と比べて異なっていた所」という回答であった。「7. 訪問先でよかったと思う場所を一番強くそう思うものから順に3つ挙げてください。」に対する回答として挙げられた場所に、1)には3点、2)には2点、3)には1点と点数を付けて総計し、点数の高いものから順位を付けてみた。上位3位を下に示す。

- 1位 ホームステイ／イヴァニフカ 34点
- 2位 大学の日本語学科 17点
- 3位 リヴィウ 15点

以下、ムカチェヴォ／ムカチェヴォ城（7点）、小学校（4点）、ウィーンの国連見学（4点）、教会（3点）、リハビリセンター（3点）、ペチェルスカヤ大修道院（3点）、シェーンブルン宮殿（2点）、リヴィウのオペラ座（1点）、ウィーン（1点）、キエフ（1点）、リヴィウの城山（1点）という結果であった。歴史的な文化遺産などに感銘を受けて上位に記入した者も少数存在するが、やはり現地の人との交流こそが圧倒的に強い印象を与えたことは明らかである。

「8. 研修前と後では、ウクライナに対する理解や感じ方が変わりましたか？」に対する回答の結果を以下に示す。

- 1) 大きく変わった 9
- 2) ある程度変わった 6
- 3) あまり変わらなかった 1
- 4) 全く変わらなかった 0

このように、ほとんどの者が研修旅行による変化があったとしている。ひとりだけ「あまり変わらなかった」とした者は、問い10. への回答として、「ウクライナ人の友人がいて、その子を見て予想していたものと似ていた」からと記入している。1) または2) と回答した者は、問い9. に答えて「どのように変わったのか」を述べているが、それを読むと肯定的に変化したことがよくわかる。以下に、いくつか挙げてみよう。

「ウクライナという国についてはほとんど無知で、寒い、ロシアの支配下といったマイナスのイメージしかなかったが、あたたかい人もいっぱいステキな国だと思いました。また、宗教心の強い国だと思いました。」

「最初はウクライナがどこにあるのかもわからず、またソ連の一部だったと知った時は、旧共産主義体制に対する暗く、恐いイメージを持っていたが、実際は近代的で、人々も温かいと思った。」

「まったく知らなかったけど、ウクライナのことに興味もてるようになった。」

「ウクライナに行く前は、ウクライナという国についてほとんど知らず、どんなところかといえば、寒そうだというイメージしか無かったが、実際に行ってみて、たくさんの

温かい人々に出会えたことによって、ウクライナという国や人々に親近感を持つことができたし、機会があれば、ぜひまた行ってみたいと思うようになった。」

「ウクライナへと行く前や到着したばかりの時は“ウクライナ”と言われてもほとんど何もイメージすることができず、空港で受けた冷たい、暗いという印象から少し不安に思っていた。今はたくさんの人々と触れ合い、そのような不安も全くなく、またぜひ来たいと思うようになった。」

「ウクライナで有名なおみやげはマトリョーシュカだという考えは観光客の固定観念だったということ。シェフチェンコはサッカー選手の名前だけでなく、偉大な詩人の名前でも有名だったということ。」

「人の温かさ、面白さがとても刺激になった。はじめはどんな人たちなのか見当もつかなかった。」

その他の書き込みもみな、ウクライナについての理解の深まりやイメージの肯定的な変化を示しているが、重なる内容も多く紙数の都合もあるので割愛する。

「11. ウクライナという国に対する印象を3つの言葉で表現してください。」に対しては、アンケート(1)と比較するとより具体的で経験に基づいた言葉が返ってきた。今度は「温かい」という言葉を挙げている者が数名いた。「温かい(人々が)」としている者もある。「寒い」と書いている者も相変わらずいるが、研修旅行中はマイナス5度という外気温が普通だったので、今度は実感から出てきた言葉であろう。(「温かくて冷たい」と書いている者、「温かい」と「寒い」を両方書いている者もあった。)[「宗教/信仰」、「歴史」を挙げている者も複数存在した。その他の言葉はあまり重なり合うことがなく、それぞれに自分が最も強い印象を受けた部分を挙げている。学生たちの挙げた「人々との出会い」、「城」、「物価が安い」、「勉強熱心」「ボルシチ」、「雪」、「真っ白」、「静寂」、「発展途上国」、「ソ連時代のなごり」、「トイレ」、「排気ガス」、「汚い」、「たばこ」、「親切」、「真面目」、「決して新しくない建物」、「ドゥルージバ(友情)」、「おもしろい」、「保守的」、「高く暗い壁に囲まれた国」、「お酒」といった言葉は、それぞれみなウクライナのある断面を示している。中には「汚い」(おそらく公共のトイレのこと)などの否定的な言葉も出てくるが、良い面も悪い面もひっくるめさまざまにウクライナに出会ったということであり、(後述する一人の学生の例を除いて)このような観察がウクライナに対する全体的な好印象を損なってははいない。その証拠に、「汚い」と書いた学生は、次の問い「12. ウクライナにまた行ってみたいですか?」では「強くそう思う」を選択しており、問い6. でもホームステイでの「人との出会いや交流の良さ」について書いている。問い12. に対する回答で「強くそう思う」を選択したものは12名、「そう思う」は3名、「あまりそう思わない」は1名であった。「あまりそう思わない」と書いた学生は、ウクライナの印象を「高く暗い壁に囲まれた国」、「保守的」、「お酒」と書いた学生であるが、残念ながらアンケートへの記述も否定的なものが多く、問い8. で唯一「あまり変わらなかった」を選択していたのと同じ学生である。しかし、この学生もホームステイについては、「現地の人々の温かさに触れ、交流することで、より深くウクライナを感じることができる」と書いており、よかつ

た訪問先の筆頭にイヴァニフカ村を挙げて「ホームステイでの人との交わりがよかった」と書いている。また、ウィーンの見学については、「良かったと思います。美しい宮殿や町並みを見ることも楽しかったし、ウクライナという国を客観的に見るちょっとしたイイ機会でもあったと思う。」と書いている。ウクライナについては残念ながらあまり高く評価していないようだが、現在のこの学生の感じ方に即した正直な意見であろう。研修旅行全体が苦痛であった様子でないのが、せめてもの幸いである。

研修旅行から受け取るものは、その参加者に応じてさまざまであろう。発見するものも、それに対する驚きの度合いも、参加者ひとりひとりの性格・知識・意識などによって大きく異なってくる。それを測定し、評点をつけることに、あまり意味があるとは思われない。むしろ、どんな参加者にも必ずなんらかの発見があるような研修を組み立てることが肝要だと思われる。経験は朽ちることなく心の中に残り、現時点での感じ方は将来変化する可能性を秘めている。「異文化体験」という、知識では測れないものを目的としたこの授業の真の価値は——希望的観測ではあるが——人生の長いスパンの中で現れてくるはずだ。体験という「種子」を蒔くことにこそ、その意義があるといえよう。

【まとめ】

異文化理解というものは、ある異なる文化についての単なる知的な理解にとどまらず、その文化集団に属する人々への人間的共感を伴って初めて真の理解に達するのだと筆者は考えている。異文化理解は異文化コミュニケーションの基礎となるべきものであり、⁴⁾ コミュニケーションというものは、相手との対称関係・補完関係の二つの相がバランスよく成り立たなければ機能しない。「対称関係」とは相手との対等な立場を意味し、「補完関係」とは互いの相違を認め合い、むしろ異なる行動から刺激を受け合うことを意味する。⁵⁾ 異質で理解しがたい「他者」に対峙するという姿勢からコミュニケーションのパートナーとしての「我々」という意識への転換が、この「異文化体験」を通じて生じたことを強く願っている。そうであれば、体験は経験へと高められたことになる。アンケートの結果から見えてくるものは、概ね肯定的な態度の変化であり、この研修旅行の所期の目的を達したといえよう。

参加した学生たちは、事後活動として、5月17日に教育学部内での研修旅行報告会を行った。6月28日には、山口大学教育学部附属山口小学校で第4校時に6年生を対象とする特別授業を行い、自分たちの異文化体験を伝えた。また、研修旅行での自分たちの調査、体験、観察を一冊の報告書にまとめることになっている（今秋完成予定）。

（註）

- 1) チェルノブイリ原発の事故による放射能汚染の影響に関しても、大気中の放射能濃度は一部北部の居住禁止区域（事故現場から30キロ以内）を除けばかなり以前から自然値に下がったため、日本の外務省が出していた渡航自粛勧告は97年4月には解除されており、短期滞在での危険は無いとされている（外務省がウェブ上で公開している「海外安全ホームページ」の安全対策基礎データ：http://www.pubanzen.mofa.go.jp/info/info4_S.asp?id=182参照）。私たちの研修旅行は危険地帯に近づくことはなく、この点に関する問題は無いと判断した。

- 2) この箇条書きは、筆者自身のウクライナでの見聞と、さまざまな参考資料から得ていた知識に基づいている。参考となった文献は、上記の外務省の「海外安全ホームページ」のほか以下のものである。

伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社
1998年

黒川祐次『物語 ウクライナの歴史』中公新書 1655、中央公論新社 2002年。

中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム』東京大学出版会 1998年。

Evelyn Scheer, Gert Schmidt: Die Ukraine entdecken. Zwischen den Karpaten und dem Schwarzen Meer. Trescher-Reihe Reisen. 7., überarbeitete Auflage. Berlin, Trescher Verlag 2003

外務省ホームページ「各国・地域情勢」ウクライナ：

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ukraine/data.html>

- 3) 山口市宮野在住の萩焼作家、大和義昌さん（大和初瀬松緑窯）にお願いしたところ、こころよく応じてくださり、ゾロチヴ城博物館に抹茶碗をひとつ寄贈して下さった。まことに感謝である。この茶碗はゾロチヴ城見学の際に、博物館に贈呈した。
- 4) 石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション』古田暁監修、有斐閣 1987、 pp.45-46：「異文化コミュニケーションでは、文化の違いが意味を持つという考え方が中心前提である。各々の文化と言語の背景にある基本的なものの考え方、習俗、行動体系などを理解することが異文化コミュニケーションでは不可欠である。」
- 5) 同上、p.35

補遺 1 旅行日程

紙数の制限上提示できないが、参加学生には予定時刻入りの詳細な日程表を配布した。ここでは簡易版の日程表を参考資料として掲載しておく。

期間：平成16年2月27日—3月14日

<u>2月27日(金)</u>	新幹線で新山口から新大阪へ 「はるか」で関西空港へ オーストリア航空でウィーンへ 聖シュテファン大聖堂見学	<u>ウィーン泊</u>
<u>2月28日(土)</u>	オーストリア航空でキエフへ ホテルにチェックイン	<u>キエフ泊</u>
<u>2月29日(日)</u>	キエフ国立博物館 キエフ市内観光（ペチェルスカヤ大修道院など） 夜行列車でリヴィウへ	<u>車中泊</u>
<u>3月1日(月)</u>	リヴィウ工科大学日本語授業見学 リヴィウ大学日本語学科訪問 地元の人々を交え夕食会	<u>リヴィウ泊</u>

<u>3月2日(火)</u>	リヴィウ大学でのレクチャー (リヴィウと西ウクライナ地方の歴史について) 徒歩で市内見学 自然史博物館見学 農林大学訪問	リヴィウ泊
<u>3月3日(水)</u>	リヴィウ近郊の城巡りツアー (団体バス)	リヴィウ泊
<u>3月4日(木)</u>	野外民俗博物館見学 リヴィウ市内の学校訪問 (小中高一体型の学校) リヴィウ歌劇場でオペレッタ鑑賞	リヴィウ泊
<u>3月5日(金)</u>	ムカチェヴォ城見学	ムカチェヴォ泊
<u>3月6日(土)</u>	村でのホームステイ	イヴァニフカ泊
<u>3月7日(日)</u>	村でのホームステイ	イヴァニフカ泊
<u>3月8日(月)</u>	団体バスで村を出発 村の近くの小学校見学 農林高校見学	リヴィウ泊
<u>3月9日(火)</u>	城山 (ザモク) に登る グループ自由行動 (現地学生と) 夕方、さよならパーティー (地元の人々と) 夜行列車でキエフへ	車中泊
<u>3月10日(水)</u>	在ウクライナ日本大使館訪問 キエフ外国語大学日本語学科訪問 リハビリセンター見学	キエフ泊
<u>3月11日(木)</u>	キエフから飛行機でウィーンへ 市中心部で自由行動	ウィーン泊
<u>3月12日(金)</u>	シェーンブルン宮殿見学 国連見学ツアー 見学後、自由行動 (グループで)	ウィーン泊
<u>3月13日(土)</u>	ウィーン空港で帰国便に搭乗	機内泊
<u>3月14日(日)</u>	関西空港着 「はるか」で新大阪へ 新幹線で新山口 (小郡) へ 着後、新山口駅で解散	

補遺 2 アンケート (1) *平成16年1月9日実施

1. ウクライナの首都はどこですか。
2. ウクライナでは何語が話されていますか。
3. ウクライナの宗教は何ですか。
4. あなたがウクライナという国に対して持っているイメージを、いくつかの単語を列挙して表してください。

補遺3 アンケート(2) *平成16年3月14日実施

1. あなたは何年生ですか?
 - 1) 2年生
 - 2) 3年生
2. 事前研修会は有意義だったと思いますか?
 - 1) 強くそう思う
 - 2) そう思う
 - 3) ややそう思う
 - 4) あまりそう思わない
 - 5) そう思わない
 - 6) 全くそう思わない
3. 事前研修会での簡単ウクライナ語会話学習は、役に立ちましたか?
 - 1) 強くそう思う
 - 2) そう思う
 - 3) ややそう思う
 - 4) あまりそう思わない
 - 5) そう思わない
 - 6) 全くそう思わない
4. 事前研修会で自分たちが調べたことは充分であったと思いますか?
 - 1) 強くそう思う
 - 2) そう思う
 - 3) ややそう思う
 - 4) あまりそう思わない
 - 5) そう思わない
 - 6) 全くそう思わない
5. 3で3)～6)の回答をした人は、どういう点で不足していたと考えるか述べてください。
6. 研修旅行の訪問先で最も意義深かったところはどこでしたか?また、そう思う理由は何ですか?
7. 訪問先でよかったと思う場所を一番強くそう思うものから順に3つ挙げてください。
 - 1)
 - 2)
 - 3)
8. 研修旅行前と後では、ウクライナに対する理解や感じ方が変わりましたか?
 - 1) 大きく変わった
 - 2) ある程度変わった
 - 3) あまり変わらなかった
 - 4) 全く変わらなかった
9. 7で1)または2)の回答をした人は、どのように変わったのか述べてください。
10. 7で3)または4)の回答をした人は、変わらなかったのは何故だと考えますか?述べてください。
11. ウクライナという国に対する印象を3つの単語で表現してください。
12. ウクライナにまた行ってみたいですか?
 - 1) 強くそう思う
 - 2) そう思う
 - 3) ややそう思う
 - 4) あまりそう思わない
 - 5) そう思わない
 - 6) 全くそう思わない
13. ウィーンも見学できたことは良かったと思いますか?もしそうであれば、それは何故ですか?
14. 旅行の中で一番辛かった点は何ですか?
15. 研修旅行を改善するための提案をしてください。